

# はしがき

現在、国内には大学・短期大学等の「日本語学（国語学）概論」用テキストが多く出版されている。大学・短大の専門教育科目の入門期学生、実際には1・2年次学生で、入学後にはじめて「日本語学何々」という講義を受講する学生を主たる対象として、日本語研究の幅広い分野にわたってその全体像を示し、基礎的・伝統的知識や最新の学説・研究の動向に関する情報を提供することを目的とするものである。以後の講義科目や演習科目へと進んでいくための動機付けをする、という重要な役目も担っている。

本書も同様の、日本語学入門期の平易な概説書をめざしている。が、読者の対象を、文学部系学部日本語研究専攻コースの学生に限定して考えているわけではない。他の専攻コースの学生、たとえば、文学部系学部内の日本語学専攻以外の学生、日本語教育専攻の学生、教育学部系の学生、短期大学の学生、さらに、一般教育・教養教育として受講する、その他の学部の学生など幅広い読者を想定している。

既存の日本語学テキストや概論書にも、平易な記述をめざしたものは少なくない。しかし、これは全くの個人的な、漠然とした感觸であるが、それらの多くは既存の知識の解説に記述の大半が費やされ、そのために大学院生程度の専門研究レベルに達した段階になって、ようやく個々の記述の意図や趣旨が理解できるようになるのではないか、と思えるのである。本書の著者の短期大学や教育学部でのつたない教育経験からは、特に日本語学研究専攻の学生を対象としない講義で使用するためには、相当の工夫をする必要があるように感じている。

それは、単に記述内容の難易の問題ではないように思う。すでに母語を不自由なく使える人に対しては、なぜその言語を研究するのか、言語研究においてはなぜそのような研究の視点を持つのか、そのような研究の発想をする

## 2 はしがき

メリットはどこにあるのか、なぜそのような術語 = 概念が必要なのか、そもそもどうしたら言語を客観的研究の対象として切り出せるのか、というあたりに意識的に重点を置くことがいっそう大切なのではないか。研究成果としての知識の羅列に終始しては、母語の研究のおもしろささえも伝えることはむずかしい。

そのためには、まず身近な、日常の言語事象に関心を抱き、注意深い観察の目をそこに向けていく姿勢をもつことが第一歩である。これは、日本語研究専攻の学生にとっての研究入門においても、何ら変わることはないであろう。たとえば、本書 3.5. 「誤用と語彙・語法の変化」、4.1. 「誤用と文法」に述べた、身近のなんとなく「おかしい」言語表現・言語運用の実例を探し出してみようという試みは、その一例である。実際に本書の著者が担当した講義のなかで、学生自身が見つめてきた次のような実例は、いずれも単なる「誤用」として処理してしまうには惜しいものばかりである。

責任転換！ (TVドラマ番組)

元来、変わっている彼女のことだから本当に帰ってしまうとも限らない。

(大衆週刊誌記事)

足に何かつけると熱が朝まで下がります。 (TV視聴者投稿ハガキ)

胸のくぼみはかなり目立つもので三歳くらいになれば手術するように言われています。 (一般新聞投稿記事)

見れ、よーく見れ。 (TVドラマ番組)

勘太はじまんそうにいました。 (童話)

は語の意味・音形の類似から生じる、類推・類音牽引という現象を説明するための格好の材料である。 は打消表現から意味を変えずに打消の語が脱落した例で、現在の若年層に頻用される「何気に(=何気なく)立ち寄った。」という語法と同じ原理がはたらいている。古代語にも「ナノメナラズ:ナノメナリ」などの類例が見つかる。 は「マデ:マデニ」の、 は

「バ：タラ」の用法の違いを考える文法研究の入口となる。は動詞の活用についての固定的・規範的なとらえ方に対して、反省的な見方を意識する契機となりうる。は接尾辞「ソウ：ゲ」の違いを意識し、さらにそこから人称やモダリティの問題へと発展させていくことも可能である。

本書がカバーする、日本語学概論書としての広さや深みにおいては、物足りなさが残るかもしれない。その分を補うものとしては、研究の動機付けや言語の観察の基礎的観点、研究の発想や手法、術語＝概念の存在意義、日本語への客観的な見方などに、努めて意を尽くしたつもりである。その意味では、「日本語学概論『以前』」の概説書を志向している。

本書の各節の末尾には、課題をいくつか提示してある。内容もばらばらであれば、解法の道筋も難易度もばらばらである。著者自身に予め、解答が用意されていないものも少なくない。ただしそこでは、周囲の日本語環境からのデータの「収集」と、データに対する「観察」を意識して多く取り入れている。既存の知識を一方向的に与えることにならないようにするための配慮でもあるが、やはり研究・学問のダイナミズムは、みずから目と耳を駆使して悪戦苦闘することから得られるものであるからである。時にやや高難度の「考察」と「文献講読」が含まれている。講義用テキストとして使用される場合には、受講学生や講義期間にあわせて、講義担当者の判断により、適宜取捨選択されてかまわないだろう。

巻末に参考文献を付したが、必ずしもその分野における基本的代表的な最重要文献を網羅しているわけではない。本書の記述に関係するもの、本書の記述に際して参照したものの、本書の内容をより詳細に理解してもらうためのもの、本書を批判的に読んでもらうためのもの、課題の解法に参考となるものなど、これまた雑駁である。

全国の国立大学をおそった教養部改組の波は、本書の著者が勤務する首都圏近隣の大学にも押し寄せた。教養部が一括して担当していた一般教育科目

#### 4 はしがき

は、全学の教官の協力体制のもとにあらたな出発をすることとなり、教育学部の一教官にすぎなかった著者も、全くのノウハウを持たぬままに全学の学生の前に立ち、「教養科目」としての日本語を講義することになった。それはそれとしてたしかに新鮮な経験であったが、やはり「教養としての日本語学」において、学生に何を伝えることができるのかという悩みの方が大きかった。教養科目は複雑で高度な専門的内容を、単に「うすめた」ものであってはならないはずである。かといって、いわゆる「おもしろいお話」の散漫な羅列であつてもならない。もとより、おもしろい話をするごとと、おもしろく話すことは苦手である。というより、大学の講義の評価基準に「おもしろさ」は無縁であると思っている。折りしも、ひつじ書房社主松本功氏より、半期単位の教養科目にも使える日本語学テキストを、という提案をいただいた。斬新な発想に興味を感じてお引き受けしたが、書き進めていくうちに、日本語学専攻学生にとっての「概論『以前』」の概説書ということも、強く意識するようになった。

本書の執筆にあたり、数多くの先行研究から恩恵を授かっていることはいうまでもない。本文中でそのすべてに言及したり、ここにすべてを列記したりすることは不可能である。ここに謝意を表することで御寛恕いただきたい。ただ、本書の原稿段階において、筑波大学講師橋本修氏より極めて貴重な御助言を賜った。ひつじ書房松本功氏からも種々の御援助をいただいた。このことは特に、記して感謝申し上げたい。

本書について大方の御批正を賜れば幸いである。

1996年8月

著者識

## 目 次

はしがき .....	1
1. 「日本語学」とは何か .....	9
1. 1. 日本語学と日本語問題...9	
母語話者と母語(9)    いわゆる「ら抜き言葉」(10)	
外来語の音形(12)    母語研究の目的(13)	
1. 2. 言語の単位と研究分野...14	
文・形態素・音素(14)    研究分野(16)	
1. 3. 人間の言語の特徴と言語の機能...18	
言語の特徴(18)    言語の機能(19)	
2. 日本語の音声・音韻 .....	23
2. 1. 音声と音韻...23	
ガ行子音(23)    音韻論的対立(25)	
2. 2. 言語音の定義と日本語の母音・子音...26	
調音器官(26)    子音の定義(27)    母音の定義(28)	
相補分布(29)    日本語の音声・音韻の目録(32)	
2. 3. 日本語の拍...33	
音節・拍(33)    日本語の拍の体系(34)	
言語間の体系のずれ(36)	
2. 4. 新生の音節...38	
八行子音(38)    体系の「あきま」(39)	
2. 5. 濁音の機能...41	
濁音と有声音(41)    語頭の濁音(42)    濁音の表現価値(42)	
2. 6. アクセントの機能...44	

複合表示機能(44)	アクセントのとらえ方(45)	
複合語のアクセントの調整(46)		
2.7. パ行音の分布と機能...47		
パ行音の音声(47)	パ行音の分布と表現価値(48)	
3. 日本語の語彙 .....		51
3.1. 語彙と語彙体系...51		
語と語彙(51)	語彙体系(52)	
3.2. 語の意味...55		
「意味」の多様性(55)	意味のあり方(56)	
明示の意味と副次的意味(58)		
3.3. 類義語・対義語...60		
類義語の意味のとらえ方(60)	対義語の類型(63)	
3.4. 語種...65		
語種の定義と頻度(65)	語種間の意味類型(66)	
語種の境界(67)		
3.5. 語形・語義の変化と語彙の交代...69		
語形の変化(69)	語義の変化(70)	語彙の体的変化(71)
誤用と語彙・語法の変化(72)		
3.6. 位相語と造語...74		
位相語(74)	女房詞(75)	造語(76)
3.7. 語彙と表現...78		
語種と語感(78)	語彙と表現価値(79)	
4. 日本語の文法 .....		83
4.1. 文法論と誤用...83		
文法と文法論(83)	文法論の観点(84)	誤用と文法(86)
敬語の誤用(89)		

4.2. 文の構造と叙述内容・言表態度...91	
叙述内容と言表態度(91)	終助詞の機能(94)
助動詞のとらえ方(95)	
4.3. 活用...97	
活用表の多様性(97)	体系化の観点(100)
活用の「ゆれ」(102)	
4.4. 主語・主題...105	
「主語」の認定(105)	「八」の位置付け(107)
「ガ」の位置付け(109)	主題・対比・総記・中立叙述(110)
4.5. 連用修飾...112	
「連用修飾」の認識(112)	補語・状況語(113)
情態・程度・陳述の連用修飾(115)	
4.6. 連体修飾...119	
「連体修飾」の認識(119)	関係節(119)
限定節・同格節(122)	名詞節(125)
4.7. ヴォイス・テンス・アスペクト...127	
自動詞文と他動詞文(127)	ヴォイス(129)
テンス(133)	アスペクト(131)
5. 日本語の書記 .....	139
5.1. 日本語の文字・表記...139	
日本語環境と文字(139)	日本語の書記の多様性(140)
漢字(141)	仮名・ローマ字(143)
5.2. 現代表記の規範性...146	
正書法(146)	漢字制限(147)
送り仮名(150)	仮名遣い(148)
5.3. 現代表記の多様性...153	
漢字表記のゆれ(153)	同訓類義語・同音類義語(156)

8 目次

仮名表記のゆれ(157)	
5 . 4 . 現代表記の周辺...157	
振り仮名の機能(157)	当て字の機能(158)
6 . 日本語の位置 .....	161
6 . 1 . 「日本語」と「国語」...161	
国語・国家語・公用語(161)	国語・日本語(163)
6 . 2 . 日本語の類型と系統...164	
日本語特殊論(164)	類型(166) 系統(167)
参考文献 .....	169
索引 .....	175